

令和5年度 保育所実習

保育所実習担当 大元千種・伊藤佳代子・斉藤範子・助安明美・田中美貴
谷川友美・野口 直子・原本賢一・松崎 優・渡邊晴香

令和5年の保育所実習は、保育実習Ⅰ（保育所）を1年次2月に実施し、保育実習Ⅱを2年次の8月下旬と9月上旬の2期に分けて、県内外の公立保育所、私立保育園、認定こども園にて実施した。

実習に向けて2年間実習指導を行った。1年次では、保育実習Ⅰ（保育所）の事前指導として、実習の意義・目的・内容の理解、文書作成時の注意点、指導案・日誌の書き方などについて指導し、模擬保育を行った。2年次前期は保育実習Ⅰ（保育所）の事後指導としての振り返りを行い、それを踏まえて、保育実習Ⅱに向けての日誌・指導案の指導を行った。それぞれの実習前には、「保育士倫理綱領」についても取り上げた。2年次後期は保育実習Ⅱの事後指導としての振り返りを行った。また、1・2年合同授業にて2年生が1年生を指導する機会を持った。これらを通し、改めて実習の意味を実感し、保育者となることへの自覚を促すことができたと考える。

1年次の実習では、COVID-19感染予防対策として、体調の記録及びマスクの着用、手洗い・消毒の励行のほかに、アルバイトや不特定多数の人が集まる行事への参加は実習2週間前から禁止し、実習初日の朝に抗原検査を全員が実施するなどの対策を行った。COVID-19が5類に移行した2年次の実習では、基本的な感染予防対策を行い、アルバイトも実習1週間前からの禁止とした。COVID-19の他インフルエンザによる感染等により実習時期が変更した学生も数名いたが、おおむね予定通りに実習を終えることができた。

1. 実習先 保育実習Ⅰ（保育所）・・・大分県内120件 県外3件
保育実習Ⅱ・・・大分県内116件 県外3件
2. 実習期間 保育実習Ⅰ（保育所）・・・令和5年2月7日～20日
保育実習Ⅱ 1期・・・令和5年8月17日～30日
2期・・・令和5年9月4日～15日
3. 保育所実習の意義・目的
 - 1) 子どもと直接関わることにより、心身の発達について理解する。
 - 2) 保育所の一員として活動することにより、保育所の役割や保育士の職務について理解する。
4. 保育所実習の様子
 - 1) COVID-19に限らず感染予防対策として、体調に不調がある場合は必ず休むように指導したが、これまでのコロナ禍による免疫力低下とともにインフルエンザの流行もあり、昨年度に比べ欠席者が多くなっていた。
 - 2) 原則として1年次と2年次に同じ実習先に行くため、学生の成長を認めていただいている。
 - 3) 学生は、0歳から6歳までの子どもたちとの関りを通して、年齢による発達の違いを目の当たりにし、発達過程の理解と発達に応じた保育の必要性を実感している。
5. 2年間の実習指導を通して見えてくる学生の姿から、実習体験の影響力と実習後の振り返りの意義を痛感する。学生の保育職へのモチベーションや保育の質をさらに高めるために今後も指導体制の改善とともに、実習施設と養成校との協同体制の強化にも努めていきたい。

保育実習のまとめ



初等教育科2年 Aクラス 吉倉 亜弥

保育実習を通じて、私は子ども同士の関わりや、トラブルについて多くを学びました。子どもたちがグループで遊んでいる中でのコミュニケーション、またその際に生じるトラブルや解決方法について学んだことをまとめたいと思います。

まず、子ども同士の関わりについて学んだことは、それぞれが異なる個性を持っていることです。一人ひとりが異なる想いや好みを持っておりそれぞれの関係性にも影響を与えていることを実感しました。また、子どもたちは達成感や競争心など、さまざまな感情を抱えていることも理解しました。それぞれを尊重し、受け入れることが重要であると感じました。

保育実習中には、子ども同士のトラブルも多く生じました。おもちゃや場所を巡る争い、言葉のやり取りでの衝突など、さまざまなトラブルが起きましたが、それぞれのトラブルには解決策がありました。

私はトラブルが出た際に、子どもたちの双方を落ち着かせ、話し合いを促すことが必要であると気づきました。彼らに十分な時間を与え、お互いの気持ちや意見を聞き合うことで、問題解決のための共通点を見つけ、子どもたちが自分たちでトラブルを解決する経験を積むことが重要であると学びました。

私たち保育者の役割は、彼らに問題解決スキルや対話の重要性を教えることで、自己解決力を育むことです。トラブルが起こった場合は、関係者全員が共に考える機会を与え、主体的に問題を解決していくように促しました。子どもたちとの関係性やコミュニケーションの重要性、自己解決力の育成など、これらの学びは保育者になるための経験として大切だと思いまし

た。

子どもたちのコミュニケーション方法についても学びました。子どもは自分の思いを言葉で表現することが未熟であり、身体的な動作や表情で感情を伝えることが多いことに気づきました。例えば、1人がおもちゃを持っていても1人がそれを欲しがる場合、ジェスチャーや表情を通じて相手に気付かせる姿をよく見ました。このようなコミュニケーションのあり方を観察し、子どもたちが表現しやすい環境を作ることの重要性と、私たち保育者の役割が大きいことを知りました。私たちは子どもたちが自己表現するための様々な方法を提供し、コミュニケーション能力を育むことが大切であることを学びました。

実習の中で、子ども同士のトラブルを目撃し、解決に関与する機会も多く経験しました。例えば、おもちゃをめぐるトラブルや、友だちとの意見の食い違いなど、さまざまな問題がありました。これらを解決するためには、保育者の適切な対応が求められます。トラブル解決の基本的な手法は、まず子どもたちの話を聞き、お互いの気持ちや意図を理解することです。その上で、問題を共有し、協力して解決策を見つけるように促すことが重要です。

保育実習を通じて、子ども同士の関わりやトラブルについて学ぶことは、子どもたちの成長や社会性の発達に深く関わる重要な要素であることを実感しました。彼らが自己表現し、コミュニケーションスキルを磨きながら、トラブル解決の力を身につけることは、将来的な人間関係の構築や問題解決能力の発達にも大いに役立つことを学びました。

最終的には、子どもたちが互いを尊重し、思いやりのある関係を築くために、私たち保育教諭のサポートや指導が不可欠であることを実感しました。

気づきから得られるもの

初等教育科2年 Bクラス 堤 奏乃香

私が保育所実習に行ったのは、運動会の時期でした。担当させていただいた5歳児クラスは応援合戦やダンス、カラーガードを使ったりリズム表現など練習しなければならないことがたくさんあり、毎日練習に励んでいました。練習に立ち会いながら保育者の援助や子どもの姿を観察する中で、私が考えていたことと大きく違い驚いた点がありました。それは練習の進め方です。私はこのことから“子ども主体の保育”とはどういうことか、理解できていない自分に気づくことができました。初めの練習からあらかじめ保育者がイメージしていたものを子どもに伝えながら完成に近づけていくものだと思っていたのです。しかし、実際は丁寧な導入から始まっていました。

“運動会があるから”ではなく、子どもたちがその活動に興味をもって“やってみたい”と思えるようになってから始まります。そのため保育者は何か月も前から日常生活の中で、自由遊びの時間に音楽をかけたり外遊びの時間に遊び感覚で“よーいどん”の練習を取り入れたり、子どもの主体性に繋がる種まきを行います。そして、練習に入ってから保育者が一方的な援助を行うのではなく実際にやってみながらどうすればもっと良くなるか、どうしてみたいかを子どもと一緒に感じたり考えたりしながら作り上げます。そうすることで子どもたちは活動を通して感じるものややりきったという達成感を手にすることができるのだと実感しました。私はこの実習を通して“子ども主体の保育”の大切さやその内容を初めて心から理解できたと同時に、子どもの気持ちづくりをする保育計画の重要さや援助の難しさを感じました。

また園生活の中で、子どもの発達段階を知っ

ておくことの大切さを実感する場面がたくさんありました。今回は3歳以上児クラスでの実習であったため、3歳未満児クラスに比べて運動会練習を含めて、集団で動く場面が多くみられました。自分の思いを言葉で伝えられる分、子ども同士の意見の違いが起きた時に、5歳児の発達段階を踏まえながらそれぞれの子どもの性格なども把握して援助することの重要性を感じました。仲介役として援助して和解にもっていくことだけが保育者の役割ではなく、子どもの成長に繋がる援助が求められていると気づくことができました。

部分保育を行った際にも、発達段階を含めてもっと子どものことを知っておけばよかったと反省に繋がる点がたくさんありました。子どもがしっかりルールを把握できるように、私はわかりやすさに配慮しながら細かく具体的に内容を説明しました。しかし、ルールがたくさんあると子どもが忘れてしまったり、意欲が半減したりしてしまうということがありました。また、ゲームの振り返りの際に「楽しかった？」と言葉掛けをしましたが、もっと具体的に「ボールを落とさずに運べた？」と言葉掛けをする方が子どもの自信につなげることができるなど、子どもの姿を予想しながら指導案を作成しても、実際にやってみて気づくことがたくさんありました。その経験から、指導案を立案するだけではなく、実際に私自身が道具をつかって実践してみるとということの大切さに気づきました。

私は今回の実習のなかで、“できた”という感覚を得ることはできませんでしたが“こうすべきだった”と感じたことはたくさんあり、その反省から自分自身が成長できたと強く実感しています。実際に子どもと関わりながら保育者の援助をすぐそばで見ることができる実習だったからこそ得られたものであり、きついこともありましたが振り返ると学びの多いとても貴重な経験となりました。

子どもの成長・発達に触れて

初等教育科2年 Cクラス 塩崎 七海

私は地元の認定こども園で保育実習を行いました。1年次には3歳未満児のクラスで実習を行い、2年次には3歳以上児クラスで実習を行いました。市内の園の中で最も規模が大きい園ということもあり園児数が多く大変だと感じる場面も多々ありましたが、より多くのことを学ぶことが出来ました。

まず1年次の実習では各年齢での発達の違いとそれに伴う保育者の援助の変化がとても印象的でした。1歳児は排泄や手洗い、様々な準備などを子どもたちが自分でできるようになるために、保育者が途中まで手を貸すなどの援助をしていました。2歳児になると保育者の呼びかけを聞き、排泄や手洗い、準備、さらには着替えなど日常生活の中で多くのことを子どもたち一人ひとりが自分自身で行っているのを見て1歳児と2歳児でこんなにも発達の差があるのだと感じました。

さらに0歳児では月齢によって食べる物や食べ方、出来ることなど多くのことに発達の違いがあることを学びました。特に食事の内容に関しては離乳食を食べている子もいれば、固形の物食べている子がいたり、お茶を飲む子がいれば、牛乳を飲む子がいたり月齢や発達段階によって違いがありました。このことから、給食室との連携や保護者とのやり取りを通して子どもたちの給食が準備されていることを知ることができました。

また、食べ方も子どもたちの成長・発達によって異なり、手で掴んで食べる子や上手にスプーンを使い食べる子など様々な姿がありました。3歳未満児クラスではどのクラスでも子どもたち自身で出来ることや出来そうなことは保育者が見守り、子どもたちの成功体験を積むことで

子どもたちの出来ることを増やすなど個々の発達段階に応じた援助を行っているということを学びました。

次に2年次の実習では、3歳未満児との保育内容の違いが印象的でした。3歳以上児になると子どもたち自身で出来ることがさらに増えていました。大きく異なることは給食の準備を子どもたちが行うこと、お当番の役割をすることなど日常生活の中で役割を持つことでした。また、活動内容についても1つの活動時間が長くなったり外遊びが増えたり、異年齢との関わりが増えたりと3歳未満児との違いがありました。

さらに、環境構成では日めくりカレンダーの活用やお当番表の掲示、今週の予定表の掲示などを整え子どもたちが時間を意識して、自ら行動できるように工夫するなど年齢に応じた保育や教育が実践されていることを学びました。

私はこの2回の保育実習を通して全クラスで設定保育を行ったため、計6回の設定保育を経験することが出来ました。それぞれの年齢の発達やクラスの特徴を考慮した上で指導案を作成し、安全面に配慮しながら準備物を作製するとともに、子どもたちの様子を見つつ臨機応変に進めながら設定保育を行ったことは、貴重な経験になったと感じています。

設定保育後に保育者の方々から助言を頂き、今の自分には環境構成の工夫、子どもたちがさらに活動に興味を持てるような導入の工夫などまだまだ学ぶことや身につける技術が多くあることに気付くことが出来ました。この気付きを大切にして今後、保育者として働き始めた際にこれらの設定保育での学んだことを生かして子どもたちがさらに楽しむことが出来る活動が出来るようになりたいです。

保育士という仕事



初等教育科2年Dクラス 名村千帆里

私はこども園に実習に行った。こども園に実際に通ったことがないし高校で少し実習に行ったぐらいの経験での保育実習だった。1年生では保育の基礎知識を沢山学ぶことができるが、実際自分のものにできておらずいろいろと不安の中2月の実習を迎えた。

最初の配属クラスは1・2歳児。私の腰よりはるかに小さい子どもたちの可愛さに魅了されつつどう保育をしていくのかとても悩んだ。担任保育者の方に「困ったら聞いてね」と優しい言葉をいただき実習がスタートした。1歳児は月齢等によって言葉や運動機能の発達に個人差が見られた。特に私が対応に困ったのは言語面だ。子どもたちは初めて来た私にとっても興味を持っていたが、具体的に私と何をしたいのか言葉があやふやで伝わりづらかった。私の名前を「先生」とうまく言えず「ちーちゃん」と呼んでいた。アイコンタクトで会話をする子がいたりした。何日間かかわり続けていくことで、表情や声のトーンで気持ちを理解することができるようになり気持ちが繋がってきた気がした。2歳児は1歳児と比べこんなに発達するのかと驚いた。特に運動能力に差があり、冬でも元気に走り回る子どもたちを見てこの時期の環境設定は発達に深くかかわってくるなと考えた。おはじきや木で作られたおもちゃごと、赤ちゃん人形など様々な素材や模倣遊びができる環境で私も楽しかった。この園は縦割り保育などができ年上の子を見て学ぶ機会があり、子どもの社会性や協調性、思いやりの気持ちなどが育まれていくと考察した。この実習では消極的な自分が顕著に表れたが、自分なりに考え子どもと接することができたと思う。

9月の実習では1期の施設実習の課題をもと

にのぞんだ。配属クラスは3・4・5歳児だった。全クラスで関わり方が違い、柔軟な対応が必要だった。1年生の時とは違い、子どもとの関わり方は2、3日でなんとなく読み取ることができた。だが、「気になる子」と言われる子どもに対してはずっと悩んだ。どうすればこの子どもと距離を近づけることができるのか、そしてどのようなことに興味があるのか読み取ることにかかった。自分なりに「気になる子」とのかかわりの仕方の構築が難しかったが、日誌の中などで保育者に相談して少しずつ解決していった。実習最後の方は自分なりに考えなどがまとまってきて自分自身の自信につながった。私は1年生の時から自分に自信が持てず、消極的に動くことがほとんどで保育者にも質問ができず課題になっていた。だが、2年生の実習では少しでも殻を破るような行動ができるよう自分なりに気になる点を質問していった。

この実習では自分の保育観について考えることができた。ただ小さいころの先生に憧れただけではその先生のようになれない。どんな子どもがいるのか、その子の家庭環境はどうか、どんな環境構成にしていくか、保育士としてどう援助をし続けていくかななどを自分なりに考え構築することで初めて憧れる保育士に近づくのではないか。あと少ししかない大学生活を未来の自分のために使っていきたい。

保育者のすごさ



初等教育科2年 Eクラス 山下 夢夏

実習に行く前までは未満児とのかかわり方が分からず、会話できるのか、どこまで援助したらいいのか、自分では何が出来るのだろうか、などの不安と疑問ばかりでした。しかし、保育実習Ⅰで2歳児クラスに入らせていただいた際、自分が思っていたよりも会話や朝の支度、給食を食べることなど自分で出来ることが多く2歳児の発達過程を身をもって感じる事が出来ました。しかし、まだまだ自分の気持ちを上手く伝えることが出来ない年齢なのでいざこざが多く、時には手が出てしまうこともありました。そのため私は仲裁をすることに苦戦しました。最初は何もできずにただ謝るよう声掛けをしたり保育者に仲裁を任せたりしていました。しかし大切なのは子どもの気持ちを聞いて思いを受け止め、代弁しながら自分の気持ちの伝え方を声掛けすることが大切だと学びました。

ある日クレヨンで色塗りをする活動の際にこれまで元気に友達と遊んでいたA児が急に元気がなくなり色塗りをしようとしませんでした。私自身も2人の保育者も別のタイミングで「どうしたの？先生と一緒に塗る？」「これは何色かな」など色塗りをするよう促しましたが、元気はないままで何も言葉を発さず、色塗りをしようとしませんでした。すると1人の保育者が「もしかしたらみんなとクレヨンが違うからかもしれない」と言い、休みの子のクレヨンをA児に貸してあげるとA児はクレヨンを手にして色塗りを始めたのです。私はこの保育者の対応を見てA児が何も言葉を発さなくても思いを汲み取り、その思いに沿った対応をしていて子どものことをよく理解しているからこそ分かったのだろうと思い保育者の凄さを感じました。

また、靴下を履く時や上着を着る時、排泄を

する時などの際に全て援助をするのではなく、見守りながら「自分でもやってみる」とする気持ちを大切にしながら関わり、途中まで援助をしてそこから自分でできるよう声掛けしたり、一緒にしたりしていました。そういった工夫をした援助をすることで子どもたちも「自分で出来た」という喜びや達成感を得ることが出来、自信に繋がり、さらには成長を促すこともできると学びました。そして子どもたち自身が自分で出来るような環境の工夫や出来た時にはたくさん褒め、一緒に喜ぶことも保育者の関りとして重要であると知りました。

保育実習Ⅱでは部分実習があり、私が担当した4歳児クラスはとても元気がよく、自分の感情を表出できる子どもたちでした。普段の保育の中で担任保育者は話をする前に簡単なマジックをしたり小さな声で話をしたりなどの工夫をしながら話をしていました。私も部分実習でルール説明をする際、参考にしながら話をしようとしたが思ったようにいきませんでした。大きな声で話してもどれだけ声掛けしても他のことに気が向いてしまい、子どもたちは私に注目してくれませんでした。実際に子どもたちの前に立って話をする事で注目してもらうための工夫の大切さや自分の引き出しを増やすことの必要性について気付きました。それと同時に、保育者の子ども理解や技の凄さを体験して学びました。これらだけでなく他にもたくさん保育者の凄さを感じる関わりが多くあり、私もこのような保育者になりたいと理想の保育士像が出来ました。

私はこの20日間の保育実習を通して月齢ではなく一人ひとりの性格やその子の持っている力を理解し、それに合った声掛けや援助をして個別に対応を工夫・変化させることが大切だと感じました。実習で学び得たことを忘れず保育の知識を深めていけるようこれからも頑張っていきたいです。